

変異したサッカード

ハイパーテキスト時代における文字の再イコン化とその受容美学上の諸帰結

ペーター・マトゥセック [安川晴基訳]

Peter Matussek: Mutierte Saccaden.

Die Re-Ikonisierung der Schrift im Zeitalter des Hypertextes und ihre rezeptionsästhetischen Konsequenzen

書物というメディアは終焉を迎えたのだろうか。明らかにそうではない。書物文化は終わったのだろうか。どちらかと言えば、そのように思われる。少なくとも情報の蓄積、知識の編制、テキストの調査といった書物の基本的機能のいくつかは、そのような働きをより効率よく、より迅速に支えてくれる電子記録メディアに受け継がれた。これと軌を一にするのが新たな提示形式の数々である。それらの形式は、われわれの知識の獲得方法や思考スタイル（ルットヴィヒ・フレック）に影響を及ぼす。文字の提示法における変化を最も顕著に表しているのがハイパーテキストだ。もちろんハイパーテキスト文化を話題にすることはまだできない。この世から徐々に退いている書物は、教養の徽章を道連れにしているように思われる。それどころか、追放された古きものを懐かしく回顧する者にとっては、より緩やかで、観想的で、把握しやすいメディアであるという、書物

の防衛機能は魅力を増す。それに対して、ハイパーテキストはこれまで、せいぜいのところハイプ（流行の話題）、つまり短命な礼讃をもたらしたにすぎず、使用文化は生み出していない。この状況はどのように変わりうるだろうか。

ハイパーテキストに関する理論はこのことについていろいろと考えてきたが、また説得的なヴァージョンを提供してはいない。なぜならこの理論は、これまで糸口として文字とその知覚の二つの次元に過度に焦点を絞ってきたからだ。つまりテキストの構造と音の固定という次元である。しかしながら、表音文字や表語文字といった文字の種類は常に、知覚の過程に深い影響を及ぼす視覚的次元も有している。この明白な事実、印刷されたテキストから、デジタル方式で提示され、リンクを貼られたテキストへの移行というメディア革命のもたらす帰結について議論される場合に、これまで適切に考慮されることがなかった。

それゆえに、ハイパーテキストについて誤った評価がなされたのである。それらの評価は——ネットワーク化の構想に焦点を絞るのか、あるいは音の固定の種類に焦点を絞るのかに依じて——例えば間テキスト性のより進んだ形式（ボルター、ランドウ）や第二の口承性（オング）といった、ハイパーテキストが実際には展開させることのできない潜在能力を、ハイパーテキストが有しているとしたのである。以下では受容美学的なケースタディに基づいて、第一の予想も第二の予想も正しくないということを示そう（1）。それに引き続いて、ハイパーテキストの視覚的次元を考慮することが、その変化の可能性について判断するうえでなぜ不可欠であるのかを説明する（2）。ハイパーテキストによって引き起こされたわれわれの知覚習慣の突然の変異は、この観点からすれば、欠陥を含んだものであることがまずは明らかになる。なぜならこの変異ゆえに、従来の想起と想像のための機会は終わりを告げるからである。しかしその代わりに、読書における視覚形態が変化したことについてのわれわれの認識が、テキストを形づくるための適切な戦略へと変えられるかぎり、この変異によって創造的な読書の新たな可能性が開かれる（3）。私の説明はアルファベットという表音文字の領域に関係している。ピクトグラムのな書字システムが受容される際の異なった条件は、ハイパーテキスト研究にとってより好都合な、別の土台を提供してくれる（4）。

1

最初のハイパーテキスト・システムが登場したとき、それを記述して評価するためにふさわしい、出来合いの理論がすでに手元にあるように思われた。つまり間テキスト性の理論である。ハイパーテキストを分析しようと試みたときに、テキスト間の内在的な相互参照を表すジュリア・クリステヴァの定式が、否応なく思い浮かんだのだ。画面上に見えるテキストがフェノテキスト、そのテキストに連結されているが表面下に隠れたテキストがジェノテキスト、そしてリンクを作動させると、そのテキストが、ほかのジェノテキストにとつての新たなフェノテキストになる等々、ハイパーテキストと間テキスト性の理論の間に同一性を見出すことはあまりにも容易だった[1]。このように両者を同一視する可能性を利用して、非線形性、脱中心化、脱構築といったポスト構造主義の概念装置をハイパーテキストの理論に持ち込んだのが、とりわけデイヴィッド・ボルターとジョージ・ランドウである[2]。印刷されたテキストを分析するために発展させられたパラダイムをハイパーメディアに転用する際、あまりにもわずかしか顧慮されなかったことは、読書における認知的プロセスの変化である。というのも、間テキスト性の思想の要点は、印刷されたテキストの「線形性」と思われているものが、実際にはそうではないということを証明することにあるからだ。それが線形

でないのは、フェノテキストには常にあらかじめ別のテキストが書き込まれているからであり、それらのテキストを発見して、転覆として解釈することが、受容する主体の認知的仕事なのである。それに対して、間テキスト的な相互参照の構造が、技術的に実現された諸レベルの区別に適用される場合、読みのプロセスは根本的に変わる。つまり、表層構造の複雑性を把握することが、以前には主体の精神的作業の務めだったとすれば、この作業は今や時代遅れになるのだ。なぜなら、ただマウスをクリックするだけで、客体であるテキストにすでに組み込まれている、レベルの変更を実行することができるからだ。

一つの例を用いてこのことを明確にすることができる。「彼の父親の弟は北のヴェネツィアにいる」という文を理解するために、読者は心的に意味の総合を二回行なわなければならない。つまり弟と父親は叔父に、ヴェネツィアと北はアムステルダムになるのだ。この結合作業をハイパーテキストとして実現しようとすれば、この作業は容易になるどころか、妨げられる。なぜなら個々の文肢にリンクを貼れば、「弟」「父親」「ヴェネツィア」「北」という言葉について、確かにいろいろな連想資料を参照させることができるが、この場合にそのテキスト連関が問題となっている当の文は、それによって同時に消されてしまうからだ。「父親の弟」「叔父という」「知的な」リンクも、文の消滅という問題を取り除くことはできないだろう。いずれ

にせよ、ハイパーリンクのレベルの交替は、テキスト像そのものが消え去ることを意味するだろう。そのテキスト像の深層へと突き進んでいくことが肝要であるのに。

ハイパーテキストを読む際の認知的な働きについては、書字性の構造的特性のみならず、書字性に常に内在している口承性の構造的特性をも顧慮する場合に、むしろ適切に判断できるだろう。ウォルター・オングが師のマーシャル・マクルーハンにならって強調しているように、まさに電子テキストは口頭の語りに再び近づいている。オングは相互行為と参加の新たな可能性を「第二次の口承性」の特徴と考えている^[3]。実際、今日では電子的に媒介されたテキスト・コミュニケーション——それらが「チャット」や「フォーラム」などの概念で呼ばれているのは偶然ではない——において、口承の様式特徴が回帰していることが観察される。それらの様式特徴は、書字性に至る発展の過程を逆転させているように思われる。書字性への発展は、修道院の読書——ただ単に「文書化」^[4]されたにすぎない語りを声に出して読むこと——からスコラ学の読書への移行とともに始まり、もはや「字句を敬虔につぶやく者たちのための楽譜」としてではなく、静かに考える者たちのための認知的地図として考えられた様式やレイアウトの諸特徴に至って完成した^[5]。しかし口承性に回帰しているのは、まさにハイパーテキスト的な文字メディアではなく、電子メールやSMSといっ

た「線的な」電子テキストの形式なのである。それに対してハイパーテキストは、すでにそれを制作することにより費用がかかることからして、文章語の構造をより強く与えられる傾向にある。このことをハイパーテキストの理論家の多くは見落としている。彼らは、書字とは異なり口頭の語りを特徴づけている、コミュニケーションの参加というメルクマールが、すでにリンクの技術によって実現されていると考えるのである。その論拠によれば、読者は読みのさまざまな続きを選ぶことができ、それゆえに話し相手の地位に再び近づいているが、文字の方は著者と受容を切り離すため、参加を排除しているというのである。

その際にプラトンの文字批判が、注目に値するほど頻繁に引き合いに出される。プラトンの文字批判は、著者と受容の間の例の分離をすでに問題視していたが^[6]、先に名前を挙げたハイパーテキストの理論家たちの観点からすれば、その批判は適切な対抗策を挙げることはできなかった。彼らのパースペクティヴから見れば、プラトンの対話編は、会話状況を復活させるという無力な試みに思われるのであるが、しかしそれらの対話編はまさに見せかけのものであり、それが実際に守ることができるよりも、多くのことを約束するのである。「その形式は、読者を会話に参加するように招いておいて、それから彼あるいは彼女が完全に参加することを拒むのである」とボルターは書

いている^[7]。それに対してハイパーテキストは、プラトンの場合には禁止されていた参加の可能性を読者に返してくれるという。

新たな対話は、プラトンが要求したように、相互行為的なものになるだろう。それは各々の読者にさまざまな答えを提供するだろうし、またプラトンの言葉を用いれば、「誰の面前で黙さなければならぬか」も知っているかもしれない。^[8]

この論証がいかほど近視眼的であるかは^[9]、ウェブ上にある一つのインスタレーションを例に確かめることができる。そのインスタレーションはアーリントンにあるテキサス大学で実現された。それはプラトンの『ゴルギアス』を相互行為的なハイパーテキストに変えたものであり、読者にソクラテスの話し相手に扮するという可能性を与えてくれる^[10]。ハイパーリンクは、起点となる状況では、まずはプラトンが与えた対話の可能性だけを指示しているが、読者は電子メールの記入欄を介して代わりの答えを書き込むこともできる。その結果、対話は投書のダイナミズムに従って、仮想的にどんどん枝分かれしてゆく。

この対話ゲームに応じる者は、対話の素材の中により深く入ってゆくのではなく、その基礎を掘り崩しているのだということにすぐさま気づくだろう。仮に——もっともこのようなこ

Socrates asks:

I am glad to hear it; answer me in like manner about rhetoric: with what is rhetoric concerned?

Either you reply:

With discourse.

Or you reply:

I'm afraid that this question requires a lengthier reply than your previous ones.

- Rhetoric is not simply concerned with "discourse," which is, presumably what you'd like me to answer. It is, rather, a worldview. If a philosophic perspective would seek the truth, a rhetorical perception would look at how language is working to produce what functions as truth.
- Rhetoric is concerned with persuasion.

Sherrin Roberts u.a.: *The Socratic Dialectic. An on-line, interactive version of Plato's Gorgias*, Arlington (Texas) 2002.

とは誇大妄想に近いのだ
が——對話の相手が皆、
プラトンよりも賢いとし
よう。このように想定し
た場合でさえ、對話に参
加するためにハイパーテ
クストを用いて、より内
容豊かで「生き活きと
した」對話を生み出すこ
とは、ほとんどできない
だろう。なぜなら、当然
のことながらプラトンの
對話編は、作劇上、徹底
的に構成された作品であ
り、まさに口承的ではな
く文学的なテクスト戦略
を用いることで、活き活
きとして臨場感のある印
象を与えているからだ。
ヤン・アスマンが説
明しているように、ギ
リシャ人の初期の文書

資料は、特定の間テクスト性のタイプによって特徴づけられ
る。(つまりヒュボレプゼ (Hypolepse) である。「ヒュボレプシ
ス (Hypolepsis)」という概念は、もともと吟遊詩人の競争で用
いられた。その競争の規則によれば、吟遊詩人はホメロスの朗
唱を、ほかの者が朗唱を止めたちょうどその箇所から続けなけ
ればならなかった。この言葉はこの意味でレトリックでも用い
られた。ヤン・アスマンは、テクストがみずからのテクスト性
そのものを主題とすることによってほかの先行するテクストを
引き合いに出しているような、すべての文書資料にこの用語を
用いることで、その概念を拡張している。そのようなことが生
じた理由は次の点に見ることができる。つまり口頭による伝承
が、文字による伝承によって置き換えられたことで、一種の欠
落の経験が必然的にもたらされたのである。口頭による語りの
直接性に、文字によるコミュニケーションの匿名性が取って代
わったのだ。

コンテクストの外に移され、状況に関して抽象的になり、い
わば無防備にあらゆる誤解と拒絶にさらされているテクス
トは、この状況決定の喪失を埋め合わせる新たな枠組みを
必要とする。「文学の場合、みずからの状況を決定する
枠組み条件を自己の内に取り込んで明白にし、それによっ
て独立性を獲得するのは、テクスト自体なのである。」^[11]

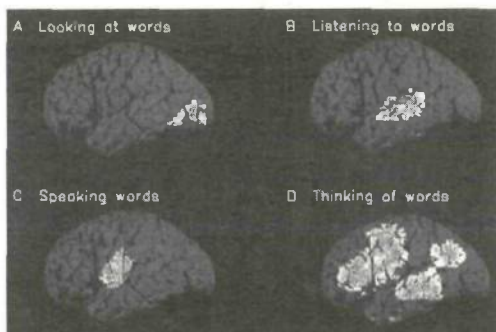
その典型的な例が、当然ながらプラトンの『パイドロス』の文字批判である。この対話編をヒュポレプゼの観点から読むなら、確かにここで問題となっているのは口頭による語りの状況の喪失を補償することであるが、この補償はまさに口承性の特徴ではなく、書字性の特徴を帯びていることが、明らかにするのである。そのようなヒュポレプゼを生み出すことに、ハイパーテキストは不向きである。なぜならハイパーテキストは、フェノテキストの内部で築き上げられなければならない自己言及の複雑性を、レベルの交替によって弱めてしまうからである。マウスをクリックするたびに、アクチュアルなフェノテキストに別れを告げるハイパーテキストは、口頭の語りに、少なくともそれを補うようにして接近する代わりに、状況から切り離すという文字の原理を先鋭化させるのだ。

2

これまで見てきたように、間テキスト性のパラダイムも「第二次の口承性」という命題も、ハイパーテキストを説明する用語としては不適切である。それゆえ最近では、この書字タイプについての議論は諦観的に方向転換され、すでに締めくくられた^[12]。しかしながら、そのような告別の身ぶりは、時期尚早であり不必要である。ハイパーテ

クストは近い将来も、文字に関連した情報蓄積と検索の支配的なモデルであり続ける。ハイパーテキストの洗練化、つまりハイパーテキストの可能性を実りあるものにするような使用法がまだ欠けていることの理由はむしろ、われわれの文字使用に革命をもたらしたハイパーテキストの最も重要な特性が、いまだ適切に注目されてこなかったことにある。ハイパーテキストを読むことが、印刷物を読むことに對して必然的にもたらした変化を調べるなら、その特性が見えてくる。

グーテンベルク銀河系の諸条件下にある読書の特徴づける神経生理学的なプロセスでは、視覚皮質の関与する度合が極限まで縮減される。読書をする際の脳の活動をPETスキャンした画像と、文字知覚とイメージ知覚の相互干渉テストによって、次のことが確認される。つまり読書をするとき、われわれは普通、ただ不完全な視覚的メルクマールだけを拾い上げているのだが、意味をあらかじめ予測して把握するという行為によって不正確な文字認識を補うためには、それらのメルクマールだけですでに十分なのである^[13]。つまり基本的に読書というプロセスでは、われわれはテキストの意味を把握するために、文字像を度外視するのである。アライダ・アスマンが強調しているように、読むということは、決して凝視することではない^[14]。もちろん文字の歴史では、この区別を傾向として廃止する試みが、いっつもなされてきた。手稿文化ではまだ観相学的に個別



文字処理のさまざまなモードにある脳の活動の PET スキャン画像。視覚皮質は、ただ文字の形を認識している場合には活動しているが (A)、意味を産出するために決定的な、ほかのすべての読書の操作の場合には活動していない (B、C、D)。

出典：Kandel, Eric R. u.a. (Hg.): *Neurowissenschaften. Eine Einführung*.
Heidelberg 1995, S. 17.

化されていた文字像を統一し、そうして匿名化するいかなる段階も、反対の動きを伴ってきた。それらの動きは、脱アイコン化された文字像を再びアイコン化することを試みた。例えばグーテンベルクは彼の印刷物を、できるだけ聖書の写本と区別できないようにすることに努力した。一方で初期の印刷本は、余白や行間の注釈によって脱匿名化された。最終的に大量印刷の技術がより統一的な文字像を定着させ始めたとき、タイポグラ

Der Panther

Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe

Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe

Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe B I L D Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe
Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe Stäbe

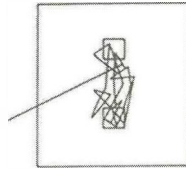
Thomas Zabka: *Der Panther* (2001). 作者の了承を得て掲載。

フィーが多様化した。使用目的——役所用、学問、芸術、広告——に応じて、特徴的な文字のタイプが発展させられた。そしてこのような活字の多様性を、タイプライターのために再び減少させることが必要になったときでさえ、反対の動きとして、具体詩によるさらなる再イコン化が生じたのである。

ハイパーテキストをこれらの対抗的な動きから原則的に区別するのは、ハイパーテキストそれ自体が再イコン化された文字

だという事実である。ハイパーテキストをその機能にふさわしく読むためには、ハイパーテキストはトポグラフィックとして知覚されなければならない。つまり、視覚的にマークされた切り替え面によって読書の可能な続きを指示す、「クリック可能な地図」として知覚されなければならないのだ。文字の歴史における上述の対抗的動きは常に短期間だけ、眺めるという行為を読むという行為に再び組み入れることを試みた。それとは異なり、ハイパーテキストの場合には、眺めるという行為は、受容する際に欠かすことのできない前提をなしているのである。それが読みのプロセスに及ぼす作用は周縁的なものでは決してない。なぜならハイパーテキストは、読みのプロセスにまったく新たな視覚制御を課すからである。つまり従来型の読書の場合、サッカードは、それが急速な運動であるにもかかわらず、比較的一様な間隔で視線を一転に集中させ、未来予持の助けを借りてテキストの連続体を推定する^[15]。それに対して、ハイパーテキストを読む人の目の動きは、ほとんど強制的に、リンクの貼られたテキストの箇所に向けられる。それによって目の

Die Kreise umfassen die Fixationspunkte, bei denen das Auge verweilt und sicher steht. Durchgezogene Linien markieren Vorwärtssprünge, unterbrochene Bogen den äußeren Rücksprünge.



テキストとイメージを知覚する際の視線の動きの比較

出典：Günther, Hartmut: *Schriftliche Sprache. Strukturen geschriebener Wörter und ihre Verarbeitung beim Lesen*; Tübingen 1988.
— Salapatek, P.: *Pattern Perception in Early Infancy*. In: L. E. Cohen and P. Salapatek (eds.): *Infant Perception: From Sensation to Cognition*. Vol. 1; New York 1957.

動きは、イメージの知覚に非常によく似たものになる。イメージを知覚する場合、目は、読者もしくは観察者の認知的背景に応じて、視覚的にマークされた箇所を無意識的に探るのである^[16]。

これが読書の過程にとって意味しているのは、サッカードが原則的に大きくなりすぎて、テキストの連続体を把握することがもはやできなくなることである。しかしながら、このことは必ずしも欠点だけを意味しているのではない。従来の読書でも、われわれは調べ物をするときに、「斜め読み」するように、つまり重要な箇所を探して飛び飛びに読むように、目を動かす。これらの箇所が、ハイパーテキスト内のリンクの適切な視覚効果によってわかりやすくされていれば、情報の探索は楽になる。

より困難になるのは、われわれがハイパーテキストを、百科事典的な目的のためではなく、美的な重要性のみならず学問的な重要性をも有しているような、物語的および文学的な目的のために用いる場合である。この場合の「適切なリンク」とは何を意味するのだろうか。

テキストが文学的および物語的な効果を発揮することができるのは、それらのテキストが呼びかけ構造を有している場合だけである。テキストはこの呼びかけ構造によって、意味構成に参加するように読者を促すのである^[18]。このような種類の読者活性化に関する卓越した理論の一つが、ヴォルフガング・イーザーの空所モデルである。彼は次のように書いている。

読者は空所を絶え間なく埋める、もしくは取り除く。読者は空所を取り除くことで、解釈の余地を利用して、個々の見解の間にテキストには表現されていない諸関係をみずから打ち立てるのである。「…」この構造において、テキストは参加の機会を読者に用意しておく。「…」空所によって初めて、読者は出来事とともに遂行し、意味を構築することに参加できるようになるのである。^[19]

しかしながらすでに見たように、ハイパーテキストの視覚制御は従来のテキストの場合とはまったく異なっている。それゆえ、空所が与える参加の機会、もはやここで述べられている方法では、つまりぶつかり合うテキストの諸層を結合する必要性を指し示すことでは、存続することができない。ハイパーテ

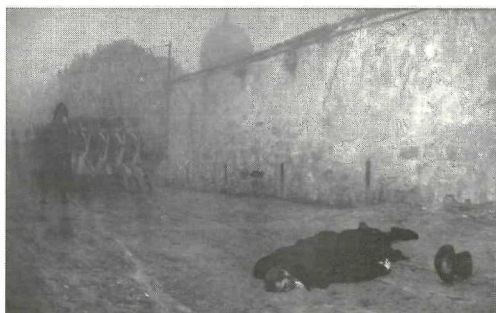
クストはかなりの程度イメージとして受容される。つまりわれわれは、この変化した受容条件に対して適切であるような空所を探さなければならないのだ。

この転換の問題を解決する一つの方法は、美術史や映画理論が修正を加えて適用した空所モデルによって下絵が描かれている。ヴォルフガング・ケンプは美術史のために、レオン・ジェロームの絵画『ネイ元帥の殺害』を例に、ここでも参加するための機会を空所が観察者に与えていることについて、有意義に語ることができるということを示している。例えば空白面は、形象のコンテキストに基づいて想像的な補足を投影するための面になるし、線の運びはその運動の方向によって、画面自体には描かれていない諸要素を指し示すし、また特定の描写の物語上の曖昧さは、出来事をみずから逆推論するように促す^[20]。

映画理論のためには、エドワード・ブラニガンとデイヴィッド・ボードウェルがイーザーに依拠して、運動のイメージ内やイメージ間にも、読者の想像によって埋められるべき「ギャップ」があることを示している。ここでは特に、映画のさまざまなカット技術を指摘しなければならない。それらの技術は、観察者にその都度、結合の仕事をするように促すのである（例えば、二つの舞台はどのように関連しているのか、どのような運動の方向がここでは選ばれているのか等々）。

ケンプ、ブラニガン、ボードウェルの観察結果を、ハイパー

テキストの受容に転用するなら、そこから二つの構成上の格率を導き出すことができる。空所による成果を可能にするために、ハイパーテキストは第一に、読者の視線の跳躍運動がテキストの一つのレベル内で、空所としての性格を有している美的に重要な注視点、つまりまだ完全な意味を持っていない注視点に導かれるように、読者の視線を操らなければならない。第二に、ハイパーリンクの場合に普通は行為遂行的なプロセスとし



レオン・ジェローム『ネイ元帥の殺害』(1868年)

ヴォルフガング・ケンプがここで空所として同定しているのはとりわけ以下の事柄である。

——壁の面。これは、絵のコンテキストによって促され、いましがた殺された者が立っていた位置として想像的に補足される。

——後ろを振り返っている兵士。その運動の方向から、絵には描かれていない射撃兵の位置が推測される。そして

——衣装が比較的曖昧であること。この曖昧さは、この場面を歴史的に位置づける際に、解釈の余地を残す。

出典：Sheffield, City Art Galleries

て視覚化されていない、テキストの二つの眺めの切り替えは、カット技術の特定の方法によって、方向運動や場所変え等々として、具象的なものにされなければならない。

このことが具体的に何を意味しうるのかを典型的に示しているのが、文字アニメーションの方法を用いた数多くのメディア芸術作品である。このタイプのインスタレーションの初期のものに、例えばジェフリー・ショウの『判読できる街』が



Jeffrey Shaw: *The Legible City* (1989).

出典：www.jeffrey-shaw.net/html_main/show_work.php3?record_id=83 (1.12.2007).

ある²¹。この場合、ユーザーは家庭用運動器具のような自転車に座る。この自転車は速度の変更や方向転換に反応し、それに応じて、テキスト建築が投影された映像も動的に変化する。電子テキストはそれによって文字どおり「経験可能」(erfahrbar = 走行可能)になる。

4

文字アニメーションのそのような可能性が、これまでハイパーテキストに関する議論でほとん

ど取り上げられなかったということは、デジタル以前の時代から受け継がれたジャンルの区別のせいだろう。読むという行為と眺めるという行為がほとんど相互干渉することがなかった間

- 1 Vgl. Kristeva, Julia: *Die Revolution der poetischen Sprache*, Frankfurt am Main 1978, S. 95.
- 2 Vgl. Bolter, J. David: *Writing Space. The Computer, Hypertext, and the History of Writing*, Hillsdale (NJ) 1991. – Landow, George P. (Hg.): *Hyper/Text/Theory*, Baltimore, London 1994.
- 3 Ong, Walter J.: *Oralität und Literalität. Die Technologisierung des Wortes*, 2. Aufl. Opladen 1987, S. 136.
- 4 「文書化 [Verschriftung]」と「書字化 [Verschriftlichung]」の区

は、テキスト学と図像学は、表音文字という現象を分けて扱うことができた。ピクトグラムの文字文化では、このような分野の必須性は以前から低かった^[22]。もしかしたらそれゆえに、文字イメージ芸術の最も進んだ端緒が、今日では東アジアから来ているのかもしれない^[23]。西洋はテキスト文献学とイコノロジーの間に学問横断的な橋を架けることをこれまで怠ってきた。ハイパーテキストによって新たに与えられた状況に対して適切に振る舞うことができるように、まずはこの橋を架けなければならない。そのとき初めて、文字アニメーションの新たな方法と、その受容美学上の帰結を、適切に評価することができるようになるだろう。そのとき初めて、ハイパーテキスト文化が、地平線上に姿を現すかもしれない。

別については次を参照。Stein, Peter: *Schriftkultur. Eine Geschichte des Schreibens und Lesens*, Darmstadt 2006, S. 159 ff.

- 5 Illich, Ivan: *Im Weinberg des Textes. Als das Schriftbild der Moderne entstand*, Frankfurt am Main 1991, S. 8.
- 6 Vgl. insbesondere *Phaidros* 274b9-278b6.
- 7 Bolter, a.a.O., S. 111.
- 8 Bolter, a.a.O., S. 119.
- 9 Vgl. auch Kolb, David: *Socrates in the Labyrinth*. In: Landow, George

P. (Hg.): *Hyper/Text/Theory*, Baltimore, London 1994, S. 323-344, hier S. 326.

10 Vgl. Sherrin Roberts et al.: *The Socratic Dialectic. An on-line, interactive version of Plato's Gorgias*; Arlington (Texas) 2002. Online: www.parryandfirst.com/plato/plato.html. このホームページは、リハビリテーションを維持するために、利用のうえに、このホームページを、 www.peter-matussek.de/Leh/V_10_Material/Demos_V/Lektionen/11/plato.htm.

11 Assmann, Jan: *Hypolepse – Schriftkultur und Ideenevolution in Griechenland*. In: ders.: *Das kulturelle Gedächtnis. Schrift, Erinnerung und politische Identität in frühen Hochkulturen*; München 1992, S. 280-292, hier S. 284 f.

12 Vgl. Freyermuth, Gundolf: *Hypertextlit R.I.P. Ein Nachruf auf die Hypertext-Bewegung. Mit einem Ausblick auf die Rolle der Literatur im Zeitalter ihrer Digitalisierung*. Telepolis, 17.04.99. – Porombka, Stephan: *Hypertext. Zur Kritik eines digitalen Mythos*; München 2001.

13 これに関しては、以下にある認知心理学的な実験を参照。 www.peter-matussek.de/Leh/V_10_Material/Demos_V/Lektionen/02/2_0.html (1.12.2007).

14 Vgl. Assmann, Aleida: *Die Sprache der Dinge*. In: Gumbrecht, Hans Ulrich / Pfeiffer, K. Ludwig (Hg.): *Materialität der Kommunikation*; Frankfurt am Main 1988, S. 237-251.

15 Vgl. www.peter-matussek.de/Leh/V_10_Material/Demos_V/

Lektionen/02/2_2_2.html.

16 Vgl. www.peter-matussek.de/Leh/V_10_Material/Demos_V/Lektionen/03/3_2_3_1.html.

17 11の読書関心に関する、ハイパーテキストの長所と短所の基本的な区別については、次を参照。Eco, Umberto: *Afterword*. In: Nürnberg, Geoffrey (Ed.): *The Future of the Book*; Turnhout (Belgien) 1996, S. 295-306.

18 Vgl. Iser, Wolfgang: *Die Appellstruktur der Texte; Der Lesevorgang; Die Wirklichkeit der Fiktion. Elemente eines funktionsgeschichtlichen Textmodells*. Konstanz 1971. – Eco, Umberto: *Lector in fabula. Die Mitarbeit der Interpretation in erzählenden Texten*; 3. Aufl. München 1998.

19 Vgl. Iser, a.a.O., S. 234-236.

20 Vgl. Kemp, Wolfgang: *Verständlichkeit und Spannung. Über Leerstellen in der Malerei des 19. Jahrhunderts*. In: Kemp, Wolfgang (Hg.): *Der Betrachter ist im Bild. Kunstwissenschaft und Rezeptionsästhetik*; Berlin/Hamburg 1992, S. 307-333.

21 カールスルーエのZKM - メディア美術館のコレクション、1989年。

22 Vgl. Coulmas, Florian: *Über Schrift*; Berlin 1981.

23 Vgl. Yoo, Hyun-Joo: *Text, Hypertext, Hypermedia – Ästhetische Möglichkeit der digitalen Literatur durch Intertextualität, Interaktivität und Intermedialität*; Würzburg 2007.